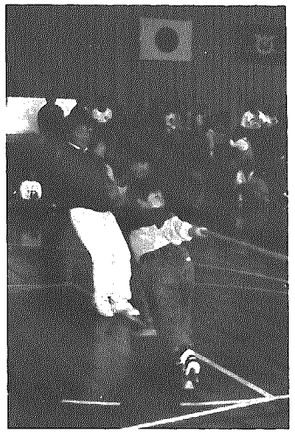
力を合わせて"それ！"

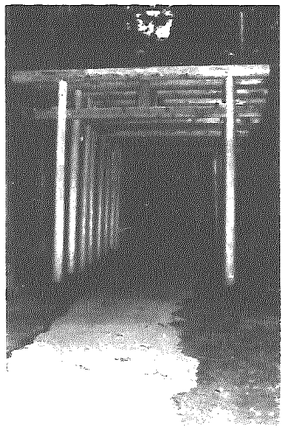
―第2回だいろカーニバル―

先月三日、村民体育館で「第二回だいろカーニバル」が行われました。このカーニバルは、レクリエーションを通して村民相互の交流を深めようと行われたもので、当日は約四百五十人の親子が参加し、生涯学習推進員や体育指導員の指導で、よりなれ岩室○×ゲームや五色綱引きなどのレクリエーションゲームで楽しいひとときを過ごしました。又、お昼にはアトラクションなどもあったりして参加者は大喜びの一日でした。



綱引きは綱引きでもちょっと変った5色綱引きの一コマ。5本のロープを使ったゲームで、お互いに助け合いながら相手をひっぱります。

装い一新、手づくり鳥居



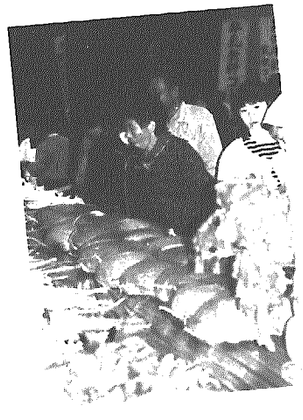
先月五日、栄地区の稲荷神社で神社鳥居の改築が地区民総出で行われました。この鳥居改築、ことし九月の台風で何本かが壊されたため行われたもので、費用も地区内から捻出し、鳥居の材料もわざわざ京都から購入するという本格派。この日も早朝から、材料の刻み、組立てと大忙しだった栄地区。作業の甲斐あってお昼すぎには、稲荷神社の鳥居も新しく建てなおされました。

おばあちゃん、火の元には十分注意を

最近、老人や幼児らの火災による死亡事故が各地で多く発生しています。そこで、消防岩室分署では1人暮らしや寝たきり老人世帯を対象に訪問し、万が一の火災や救急車通報の仕方などの指導を行っています。

これからは日一日と寒さがきびしくなります。火の元にはくれぐれもご用心ください。

ことしも、楽しさと野菜を売った農業祭



ことしも先月十九日、村民体育館で農業祭が開かれ、会場は大勢の人たちで賑わいました。

当日は、村内産の新鮮な野菜や椎茸、牛乳などの即売をメインに、コシヒカリおにぎりやおもちのサービスもあったりと盛り沢山。それに今年は「集落対抗農業クイズ」なるものも登場し、その面白さに会場内も笑いの渦。そして最後は綱引き大会と、ほんとうに楽しい秋の一日を満喫していました。

体験レポート

アメリカ農業は、いま

農協青年部アメリカ農業研修

今月のこの欄は、先月十七日から二十六日までの十日間に行われた県農協青年部アメリカ農業研修旅行に当村から参加した大岩さん、草野さんのレポートが届きましたのでご紹介しましょう。この研修は、米国の農業経営や政策を視察し、今後の経営に役立てるとともに農業後継者、リーダー同志の連帯意識を強化しようと毎年実施されているものです。

「アメリカ農業を見て」

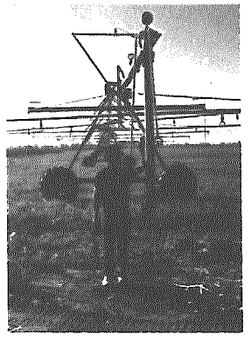
大岩富男さん（原・37歳）
地域の中核として大規模稲作経営を実践。地域農業発展と後継者のリーダー的役割を担う。

カリフォルニア州は、アメリカ西海岸に位置する農業の盛んな地域である。今回の研修で初めて自分自身の目と肌で、直接触れる機会を得ることができた。

〝とてつもなく大きい〟が、一番最初に感じた事である。バスで中央平原を走る、一時間、二時間とハイウェーを走っても見える景色は、ブドウ、アーモンド、綿等の畑が次から次へ変わるだけである。

湿気の少ない温暖な気候、豊富な日射量のあるカリフォルニアは、水さえあればどんな作物でも作れる所だが、十二月から二月までの間に降る雨が年間降雨量の九〇％以上といわれ、時期により多い所で300ミリ、少ない所で数十ミリにしかならないという。だから、水が作況を左右することも多いという。農業地域には農業用水を管理する水利組合があり、農家は組合から年間の供給量を配分され、その水量に見合った作付しか出来ないのである。水を多用する稲作農家は特に深刻だといわれる。稲作の生産費の中で水代金が二割位を占めるというが、貴重な資源なのだそうだ。

平均的な10a当たりの生産費と土地の価格を聞いてみた…。生産費は約六千円、地価は約八万円、借地代は五千円弱だという。これは、広い耕地と合理化された作業体系から算出される価格だと思う。この安い経費で反収が約700kgというから米の値段も安い訳だ。アメリカ米の生産量は年間約五百万トン、その約半分が国内消費分である。しかし、肉食中心の欧米型食生活が肥満、心臓病などの原因になっていることから、米を食べる日本型食生活が普及してきている。他にも米を食べる民族の増加があり、米の消費量が年間八％以上の伸びを示しており、この伸び率も年々増大していくものと考えられているそうだ。そうなると、十年後くらいには、国内消費だけで生産量は満杯になるという。



自走式たん水機を前に大岩さん

アメリカ人が健康食として日本型食生活に注目しているいま、日本人は米を主食としている食生活を大切にし、私たち農家は、おいしい米を安く供給するために努力しながら、日本の主食〝コメ〟を守っていかなければならないと思う。

アメリカ農業研修に参加して

草野伸一さん（栄・39歳）
農協青壮年部の副部長として各種活動に積極的に参加。地域農業の中核者として期待される。

農協青年部アメリカ農業研修団として十月十六日から二十五日までの十日間、研修に参加しました。アメリカへの出発までの事前研修やマスコミの情報、それに機内でのビデオ等で予備知識は持っていたものの、現地に着くや、その果てしなく地平線に続く草原、果樹園、水田を目前にその広大さに現実を実感しました。

研修先のウイリアムス精米場、田牧稲作農家、福島県出身で三十六歳の精米場社長。今年から稲作を手がけ、中粒種M四〇一を作付し九月に雨が降ったため収穫中だった。この地域は粘土質土壌で、平均作付面積は約百六十町歩である。精米場では、契約農家の米を精米加工し、自社ブランド米として販売したり、新品種の開発にも取り組んでいる。次に訪れたヤマトコロニー（日系専門農協）は理事九人、組合員八十五人の農協で、平均年齢六十八歳、平均農場が六十町歩程。年間売上は一千万ドル～千五百万ドル。やはりこちらでも、今、後継者問題が頭を悩ませていた。

そして、二人一組の農家滞在研修となり、私たちは日系のタケダさんという造園会社勤務のかたわらニシキゴイの販売も手がける家庭に滞在した。タケダさんは小千谷へもニシキゴイを買い出しに来るとのことで、滞在中はとても親切にしてもらった。

そして次は、カントリーエレベーターが並ぶ国府田農場へ。ここは二千八百町歩を耕作し、四百町歩を国宝ローズ種、千八百町歩をモチ米の栽培、その莫大な規模には驚きました。又、ハリス牧場での十万頭の肥育牛の飼育、その牛たちの一日の消費飼料は一千トン、四万ℓの水が必要だという。わたしが今回訪れた研修先の農家の規模はともかくとして、その生活から販売までの一貫したシステム、そして経営面においても企業的な農業を営んでおり、これらのことが農業にたずさわる私たちにとって、これから考えていかなければならない問題である。

ベーカーズフィールドの野菜畑に驚く草野さん